

# 二〇一〇年度・学力検査問題【国語】

(中学第一回)

## 注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は12ページで**一・二・三**の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていないう場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。  
また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に數えます。

1～5の四字熟語の□の部分に当てはまる漢字を語群の  
中から選び、記号で答えなさい。

1 温故□新  
(昔のことを研究し、新しい方法などを見つけ出すこと。)

2 因果□報  
(良い行い、悪い行いには、必ずむきいがあること。)

3 危機一□  
(今にも大事がおこりそうな、あぶない状況のこと。)

4 大器□成

(すぐれた人物は、年をとるにつれてりっぱになること。)

5 前代□聞  
(今まで聞いたこともないようなめずらしいこと。)

【語群】  
ア 値 イ 王 ウ 髪 エ 板 オ 味  
カ 治 キ 晚 ク 央 ケ 番  
サ 知 シ 初 ス 応 セ 欧  
タ 地 チ 説 ツ 万 テ 道  
ト 未 ト 未

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

### 【登場人物】

- ・ 小野寺徹平 (まいど先生) : 神戸 (兵庫県) から臨時教員として宮城県の遠間第一小学校に派遣された教師。里親 (引き取つて育ててくれる人) が決まらない大樹を心配している。
- ・ 大樹 (だいき) : 東日本大震災によつて家族をなくした少年。
- ・ 三木まどか : 小野寺と同じ遠間第一小学校の教師。
- ・ あんちゃん : 被災地の人々を支援するボランティア団体の代表。
- ・ 亨 (みき) : 大樹と最も仲の良いクラスメイト。

東日本大震災の後、復興 (ふっこう) がまだ進まない宮城県の遠間での物語です。

大樹には大阪に住む叔母 (おば) がいますが、大樹自身は遠間第一小学校の仲間と卒業したいと強く訴えています。その熱意に根負けした叔母は、里親が見つかればと条件を出し、ようやく探し当てたのですが、急きよその話がなくなつてしましました。今のままだと大樹は、大阪に引っ越さなければなりません。

「いや、ちょっと待つてくれ。俺たちが悩んでるのは大樹の里親の問題やろ。あんたら、勝手に俺が適任みたいに言つてるけど、俺か<sup>けん</sup>て條<sup>じょう</sup>件に外れてるねんで」

三木とあんちゃんが顔を見合わせている。

「第一、俺は独身や」<sup>どくしん</sup>

「だったら、まどかちゃんと結婚しちゃえば?」

「そうよねー、それも悪くないと思うー」

「いや、三木先生、冗談でもそんなアホなこと言うたらあきません」

「じゃ、いずれ私たちは結婚するんで、二人でお預かりしますって言えばどうかしら?」

何ちゅう無茶を言いよるんや、このお姉ちゃんは。

「新婚家庭は青少年には刺激が強すぎるって言われるかもね。でも、小野寺ちゃん、あんたが条件を満たしていなのは、独身つてことだけだろ。ならば、何とかなるつて」

「いや、ウチじや大樹のための個室だつて用意できない」

「そんなの何とでもなるから。俺が豪邸探してやつから。これで完璧<sup>かんぺき</sup>」

いや、定職に就いていないという致命的な欠格事項があるだろうが。

「じゃあ、校長先生に電話するぜ」<sup>けいじや</sup>

携帯電話を返せとあんちゃんが手を伸ばしてきた。

「ほんま、やめてくれ。こんな大事なこと、安易に決めたらあかんて。

そもそも大樹が、俺と暮らしたいかも分からんやろ」

「それは大丈夫です。あの子、先生のファンだから」

三木が即答した。

「そんな話、初めて聞く」

「私を信用してください。何度も聞いていますから」

このままだと、二人に強引に押し切られそうだ。

小野寺は、半ば覚悟を決めて言った。

「とにかく、まずは大樹本人と一度話をしてみる。事と次第によつては試しにウチに泊まつてもらつたらええ。それで一緒にやれそやつたら、あらためて俺も考える」

翌日の夕方、大樹が小野寺の自宅を訪ねて來た。

大樹が快適に泊まれるようにと、あんちゃんは布団<sup>ふとん</sup>を調達し、三木は手料理をご馳走<sup>おそなう</sup>すると言つて乗り込んでは来た。一緒に食べていくのかと思つたが、準備を終えると、「あとは一人で楽しくやつてね」と帰つてしまつた。

何となく気まずい雰囲氣で「一人だけの晩餐<sup>ばんさん</sup>」が始まつた。  
「亨んちでは、楽しかつたんか」

「はい。みなみも一緒に泊まつたんです。六年生になつたら、面白いことをやろうつて盛り上りました」

仲山みなみも一緒だつたのか。やつぱりこいつらは三人揃つて卒業<sup>そろ</sup>させでやりたいな。

行儀の良い大樹は、背筋を伸ばして三木の手料理をおいしそうに食べている。

「で、どんなおもろいことやるねん?」

『わがんね新聞』に負けない壁新聞を作りたいねつてことになりました

『わがんね新聞』とは、小野寺が遠間第一小に着任してすぐに創刊した壁新聞だ。

遠間市立遠間第一小学校の諸君<sup>しょくくん</sup>

町は全然復興しないし、家にも帰れない。こんな生活はイヤだ。

いや、おかしいぞ！

みんな、もつと怒れ、泣け、そして大人たちに、しつかりせんかい！ と言おう。

『わがんね新聞』は、この世の中と大人たちに、ダメだしをする新聞です。

創刊号に、小野寺はそんな檄文<sup>※3すきぶん</sup>を書いた。

あの大災害の直後、避難所<sup>ひなんじょ</sup>暮らしを余儀なくされた児童たちが多くつたにもかかわらず、小野寺が担任するクラスは誰もがみな明るく届託<sup>たつたく</sup>がなかつた。だがそれは、震災で無気力になり生活能力すらなくした大人たちを励<sup>はげ</sup>まさなければと、元気に振<sup>ふ</sup>る舞<sup>ま</sup>つて絶望しかない日々を支えようとする子どものけなげな本能だった。そんなのは健全な姿じゃない。子どもたちにこれ以上は我慢させたくないくて、作った新聞だった。

その創刊号は、小野寺の部屋の壁に貼つてある。ここに来るなり、大樹は熱心に読んでいた。

「タイトルは、『やつたるで新聞』がいいねって言つてます」

それは勇ましい新聞名やな。

「不満ばっかり言うのは、もういやなんです。これからは僕らには何ができるかを考える時です。だから、そんなアイデアや決意表明を載せたいと」

「大樹、それはええな。ほな、ついでに教えてくれ。なんで、大阪の叔母さん<sup>おば</sup>のところに行かへんねん？ ここに残りたい理由<sup>4</sup>はなんや」

大樹の顔から感情が消えた。暫くじっと考え込んでから、「僕、逃

げたくないんです」とぼそりと言つた。

「何から逃げたないんや」

「全部です。家も祖母も両親も妹まで、地震と津波にさらわれてしましました。でも、避難所で大勢の“家族”ができて、僕はみんなに可愛がつてもらつて、頑張れたんです。その恩返しもしないで、この街から離れたくない」

思い詰めとるなあ、こいつ。

箸<sup>はし</sup>を持つ大樹の手を見るだけでも分かつた。

「恩返しは、大人になつてからでもええんとちやうんか」

「今しかできないことつてあると思いませんか」

「例えば？」

「一緒に頑張ってきた仲間と遠間の将来について考えるのは、今しかできません」

不意に、さつきを思い出した。二人はそつくりやな。それならば大樹だって脆<sup>もろ</sup>い部分も持つてゐるはずだ。

九五年、相原さつきという児童の神戸に残りたいという強い気持ちを、小野寺は汲み取つてやれなかつた。だからこそ、大樹の希望を叶<sup>かな</sup>えたいのだ。

「遠間第一小学校児童は、誰かに頼るのではなく自分たちの力で元気を取り戻<sup>もど</sup>したいんです。遠間の復興を亨たちと実現したいんです。先生、僕をここに置いてください」

そう言つて一一歳の少年は、こちらを見た。情熱が籠もつた一途な視線だつた。

「けど、俺は来年度は、ここにおらんかもしれんで」

いきなり立ち上がる、大樹はディパックの中から分厚い紙束を取り出した。

「これ、先生に来年度も遠間第一小学校で先生を続けて欲しいという署名です」

渡された署名はずつしりと重かつた。

署名の冒頭には、「まいど先生に、来年度も遠間第一小学校で、教壇に立つて欲しい署名」とあつた。校長以下、全教員の名が一ページ目にあつて驚いた。さらには、卒業したばかりの六年生全員の名前、彼らの父兄の名もある。

「これを、明日僕ら三人で、教育委員会に持つて行きます」

「いや、ちょっと待つてくれ、俺は、こんなこと頼んでないで」

「先生は、遠間は嫌いですか。僕らの先生になるより神戸の方がいいですか」

「そういうわけやないけど」

なんで俺が詰められてんねん。今晚、詰めなあかん話は俺やのうて、大樹の将来のはずやろ。

「先生！ 遠間にいてください。ここで先生を続けてください。お願ひします」

もしかして、買やつたんか。

買を仕掛けたとおぼしき連中の顔が次々と浮かんだ。

とにかくその話は明日にしようと言つて、食事を続けた。

気まずくなるかと思つたが、大樹はよくしゃべり、笑い、そしてよく食べた。

その夜、二人は枕を並べて寝た。珍しく小野寺は熟睡した。その眠りが突然妨げられた。

叫ぶような泣き声だつた。

飛び起きると、隣で大樹がうすくまつている。大樹の肩を揺すつてやると、彼はその手を振り払い、何かの攻撃から身を守るように体を丸めた。

「おばあちゃん、お父さん、お母さん、洋子も！ もつと早く走つて!! ああ、やめて！」

小野寺は大声で大樹の名を呼んだ。

「大丈夫や、大樹。夢や。大丈夫やぞ」

我に返つた大樹を強く抱き締めて、小野寺は何度も大丈夫と繰り返した。

「おばあちゃんもお父さんもお母さんも洋子も、みんな津波に呑まれた。僕は見てるだけで何もしなかった。自分だけ逃げたんです。みんなが助からなかつたのは僕のせいです。ごめんなさい、ごめんなさい」  
〔謝らんでもええ。おまえのせいやない。おまえは頑張つて逃げ切つたや。おまえは悪くないんやぞ、大樹〕

大樹が泣きじやくつている。

※5 嘴咽する大樹の背中をさすつてやりながら、小野寺は何をすべきかを確信した。それが教師の、いや一人の大人の使命だと決心した。

逃げないー。それは俺のための言葉や。

夜明けを告げる鳥の声が聞こえた。

(真山仁『海は見えるか』幻冬舎所収)

「それでも、夜は明ける」より)

※1 わがんね：東北の方言で「ダメだ」「いけない」の意味。

※2 壁新聞：壁に張り出す新聞。

※3 機文：自分の考えを伝え、他の人に行動を促す文章。

※4 九五年・阪神淡路大震災のあった一九九五年のこと。小野寺

は当時、神戸で教員をしていた。

※5 嘴喰：声をおさえて泣くこと。

問一 線a 「届託がなかつた」・b 「汲み取つて」とあります、

本文における意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

a 届託がなかつた

ア がつかりしていな様子だった  
イ くよくよしていな様子だった  
ウ わくわくしていな様子だった  
エ しつかりしていな様子だった

b 汲み取つて

ア 相手の気持ちを分かつて  
イ 他人の考え方尊重して  
ウ 相手の言葉を信用して  
エ 他人のわがままをきいて

問二 線1 「条件」とありますが、叔母が示す里親の「条件」

として適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 新婚ではないこと。

ア 独身でないこと。

ウ 安定した収入があること。

エ 大樹に与えられる部屋があること。

問三 線2 「何となく気まずい」始まつた」とありますが、

この時の「小野寺」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。なお、「晚餐」とは夕食のことです。

ア 大樹との二人きりの生活がはじまつて最初の夕食に、緊張

している。

イ 今後の二人の人生がこの夕食で決まつてしまふのだと思い、  
気が重くなっている。

ウ 一人きりの状況を無理に作られ、あんちゃんと三木に不快感

感をおぼえている。  
エ いざ二人になると、真剣な話をどう切り出して良いか分からず、とまどつている。

問四 線3 「面白いことをやろう」とありますが、その内容の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 復興が思うように進まず、絶望的な気持ちになつている大人を励ますような新聞を作ろう。

イ 避難所暮らしが長く続き、気分がふさぎがちになるから、  
クラスのみんなで笑顔を絶やさないようにしよう。

ウ 見通しのきかない状況に不満を言うのはやめて、今自分たちにどんなことができるかを考えて実行しよう。

エ 大人への不満を言うのではなく、自分たちで何かをするべきだという宣言を壁に貼り出そう。

#### 問五 線4 「ここに残りたい理由はなんや」という「小野寺」

の問い合わせ、「大樹」はどうのように答えていますか。その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 家族を失ったことや、避難所で多くの「家族」ができたことを受け入れられるようになりたい。

イ 自分と同じような悲しみを抱えている友達や、復興から遠い状態の遠間を見捨てたくない。

ウ 遠間を元気な状態に戻すために、活動を続ける小野寺やあんちゃんを手伝いたい。

エ 自分を支えてくれたこの街の人々のためにできることを、仲間たちと考えて行動していきたい。

#### 問六 本文について述べたものとして最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 阪神淡路大震災で身寄りをなくしながらも、神戸に残るこ

とを望んだ相原さつきの願いを叶えてやれなかつた過去を持つ小野寺は、同じような身の上の大樹と出会い、支援してゆ

こうとするが、それを快く思わない大人たちに罵をしかけられる。それでも、小野寺は様々な問題から逃げずに、立ち向かってゆく。

イ 小野寺は、明るく元気な被災地の子どもたちの様子に違和感をおぼえ、我慢しないで大人たちに不満をぶつけられるようになると「わがんね新聞」を創刊した。しかし、子どもたちが考案した『やつたるで新聞』のテーマや、夜中に謝りながら泣き叫ぶ大樹の様子を知り、震災以降、自らを責めつづける子どもたちの一面に気づく。

ウ 一九九五年の阪神淡路大震災を経験した小野寺は、東日本大震災で被災した遠間に派遣され、遠間第一小学校の臨時教員として働いてゆく中で、自分の生活を保つことに精一杯で心に余裕のない大人たちの様子を知る。このことをきっかけに、小野寺は子どもたちと協力して大人たちの笑顔を取り戻すための活動をくり広げてゆく。

エ 小野寺は、家族をなくしてつらい思いをしながらも、周囲の大人や友人への気づかいを忘れない大樹の優しさに心打たれ、どんな願いでも叶えてあげたいと思うようになる。しかし、臨時教員として派遣されているだけの自分には、大樹の里親になることは不可能であると知り、願いを叶えてあげられないことに悩み苦しむ。

#### 問七 ワ線「小野寺は～言葉や」とありますか。この時「小野寺」はどうなことを決心したのでしょうか。解答欄に合わせて二十字以内で答えなさい。

寺」はどうなことを決心したのでしょうか。解答欄に合わせて二十字以内で答えなさい。

三

※3 江戸趣味に関する図版です。(資料: 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

～浮世絵に描かれた行燈、印ばんてん～



左端に描かれているのが行燈（四角いわくに紙をはり、中に火をともす照明具）



印ばんてん（背中に大きな字が書かれている）

## 二

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

次の文は、江戸風俗研究家の杉浦日向子さんの文章です。筆者によれば、日本の昔の物語における「時代もの」と呼ばれるジャンルは、おおむね、

I・「歴史好き」<sup>1</sup> II 知的好奇心が強く、歴史小説などを読む人々  
II・「時代劇好き」<sup>2</sup> III テレビ、映画で「チャンバラもの」という娯楽作品を愛好する人々

の二種類の人たちの求めによって支えられています。「日本の昔の事柄」<sup>3</sup>が専門的な研究以外のところで書かれるときには、自然とそういう人たちを対象としてしまって、ある型にはまつた、かたよったイメージが作られてしまうという現状について述べられています。

これらの閉じられた「世界」の中の、完成された「様式」についての興味は、私にはありません。そういふ意味で私は「時代もの好き」とは言えません。「時代もの」に陶酔できない私が江戸のことを語るのですから、この本は、「時代もの」としては変な本になります。といった訳で今回のこの本はできることならば「時代もの好き」以外の人々に読んでいただけたら願つてもないことで、そういう読者が対象であれば、かなり、ダイレクトに、今までと違う江戸の姿が伝わるんじゃないかと思います。

私がお話をしたいという「江戸」は「江戸時代と呼ばれる二百六十年間の徳川政権下の日本」ではなく、「江戸時代の江戸」という名の都市に起こつたさまざまな現象<sup>2</sup>のこと<sup>3</sup>を指しています。そしてこの場合、何を読めば江戸がわかるか、どこに行けば江戸に会えるかということを言おうとしているのではありません。

たとえば、雑誌などで江戸の特集を組む場合に、必ず撮影する場所<sup>3</sup>というのが決まっています。東京の中では浅草とか、柳橋、佃島、上野の界隈、隅田川の周辺、必ずグラビアになるのですが、それを見て私は江戸というものを感じません。

また、江戸的といわれる行為として、屋根舟（今では屋形舟と呼びますが、ほんとうは乗員二〇名程度の小舟は「屋根舟」であつて、屋形舟は家一軒分位の大型船のことを言います）に乗つて湯豆腐をつつくとか、駒形どじょうを食べるとか、歌舞伎、落語を見物するなどがあります。それらからも私はあまり江戸を感じていません。

もちろん、私は歌舞伎とか落語は好きですけれども、それらを通して江戸を見るということになると、現在までの年月の積み重ねによる「芸」としての成長、あるいは変質がジヤマであり、あまり良い方法には思えません。そこで、「江戸」をよりクリアに見すえるために、次のことを提案します。

まず第一に、江戸趣味<sup>3</sup>ということを否定します。  
江戸趣味<sup>3</sup>というのは、インテリアに長火鉢を置いてたり、行燈を床の間に置いたり、浮世絵や印ばんてんを珍重<sup>4</sup>したりする、平たくいえば道楽です。そういうものに精神の残り香はあるかもしれませんのが、な

にか蟬のぬがらをいじつてゐるようなもどかしさを感じます（前世紀の遺物を賞翫する「趣味」ではなく、遺物から記憶を引き出して「実用」するならば話は別ですが）。

私はまたノスタルジーも否定します。けつして昔に帰りたいというわけではないからです。いまを否定して、昔はこれだけよかつたといふような論旨の展開は稚拙ですし、片方を否定しなければ成立しないような「良さ」など求めてはいません。

ですから東京のいま現在が好きな人々（できることなら、若い人々）とともに江戸をさぐっていきたいのです。

先に、下町の江戸的イメージの土地にはこだわらないというふうに言いましたが、「それでは江戸はどこにあるのか」という設問に対しでは、いまここにありますと答えます。空気の中によく、体の中に存在している江戸、つまり「過去の発掘」ではなく「感性の開発」としてとらえて、「江戸はいまここだ」と言いきることからまずスタートしたいと思います。

江戸という都市は、言うまでもなく東京の前身であつて、同じ場所です。つまりここには **X** だけがあります。

たとえば、子供のころの自分と、いまの自分は、体験によって考え方方が変わっていますが、やはりほかのだれでもない自分ですから、江戸もまた、「東京」と名称は替わり、地表を被う建造物の様相も変化しましたが、ソバカス顔が厚化粧になつたぐらいのもので、その土地固有の「骨格」や「性格」は変わつていいないと考えます。

最近、数度目の東京と江戸のブームが起きているようで、「いま、なぜ江戸なのか」という問い合わせちらで聞きますけれども、全

く魅力のない、つまらない質問だと思います。「いままなぜ」というキヤツチ・フレーズは、いかにも胡散くさく、「いま、なぜ」ではなく、「常に少しずつ江戸」というふうな考え方をしたい、「絶え間なく意識し続ける存在」としての江戸を考えたいのです。古い昔のでき事ではなく、常にここにある同時代にまじつている江戸を見たいと感じています。つまり交差点の喧騒の中であるとか、高層の住居空間の中に江戸を感じていきたい、特に身のまわりを江戸物で固めずとも、十分、江戸を見るることはできるというふうに確信しています。

さて、江戸はここにある。では江戸とは何か、ということに移ります。

それは、一口に言えば精神と答えておきます。そしてさらに日本人の精神的なニュートラル・ポイントが江戸、そういうふうにとらえたいのです。そのニュートラル・ポイントを知ることによって、より自由自在に柔軟に思考することが可能となるよう思います。

今までどちらかというと、突出した部分の「江戸」ばかりが強調されてきたようです。

たとえば近世封建社会の中の心中だと、忠義、頽廃などがそうですが、それ以外の、江戸という事象の大半を占める、普通の、ごく当たり前の部分の江戸を見ないことには片手落ちなんぢやないかと思います。また、私自身そちらのほうに興味をひかれます。

肩に力が入るほど江戸は見えてこないというのが、実際に江戸を書いていこうとする上で私が感じたことです。力んでしまって、するつと手から抜けていつてしまう。これには、呼吸をするように楽な気持

で接するのが一番で、そうすることにより「ニュートラル・ポイント」の感覚がすんなり理解できるようです。

このコツがわかつてきたことだけでも、今まで五年勉強してきてよかつたと思います。そして五年で得たことははつきり言つてそれだけです。

江戸はこういった都市なんだと、一番はつと感じたのは司馬江漢の※11『しばこうかん  
えがく両国橋図』という一枚の浮世絵を見た時でした。それは西洋画風の遠近法を取り入れたB5判ほどの大きさのもので江漢の風景銅版画のなかでも屈指の傑作とされています。そこに描かれた光景は、今まで私たちがテレビや映画では見たことがない江戸の町の姿でした。その絵の中の江戸は、とても空が広くて青くて、湿り気がない広々とした空間でした。絵の半分が空で、低いところに地平線を描いたことにより、特にそういう印象があるのですが、この絵の中のぼがかりと突き抜けたような江戸は、今まで現代人によつて描かれたことのない江戸の姿のように感じました。そしてその江戸の眺めというのが、晴れた日の首都高速道路の上から眺めた東京の姿にピッタリと重なります。

この空のようなあつけらかんとした絶望感が、江戸市民の心の大半を占めていたのではないか……。明るい絶望感というとちょっとおかしいかもしれないのですが、絶望に近いほど明るい、そういった湿り気のなさ、その感覚に、東京人である私たちが共感を覚えた時、東京もまた江戸へとたどりつく事になるだろうと思つています。

(杉浦日向子『江戸へようこそ』筑摩書房より)

※1 様式…スタイル。形式。

※2 グラビア…本や雑誌などの写真ページのこと。

※3 江戸趣味…7ページの図版参照。9ページ下段にある「江戸物」も、同様のものを指す。

※4 珍重…珍しいものとして大切にすること。

※5 賞観…そのもののよさを楽しむこと。

※6 ノスタルジー…過ぎ去った時代を懐かしむ気持ち。

※7 論旨…話の筋道。

※8 稚拙…幼稚で未熟なこと。

※9 喧騒…物音や人声などで、うるさく騒がしいこと。

※10 近世封建社会の「頽靡」など…「近世封建社会」とは、江戸時代に見られた身分制度中心の社会であり、後ろにある「心中」「忠義」「頽靡」とは、その当時の文学作品で多く用いられたテーマを指す。

※11 司馬江漢…江戸時代の絵師、蘭学者。

問――線a「陶酔」b「胡散くさく」とあります。が、本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 陶酔

ア 仲間意識を持つこと

イ 関心を持つこと

ウ 心をうばわれること

エ だまされること

b 胡散くさく

ア どことなく疑わしく  
イ なんとなく頼りなく  
ウ どうしても信じがたく

エ なぜかしら近寄りがたく

工 筆者の説こうとしている「江戸」は、現代の東京に生きる人々が、江戸の人々が持つていた感覚にごく自然に接した時に、浮かび上がるものだから。

問二 ——線1 「今までと違う江戸の姿」とあります、文中の

-----線ア～エの中から当てはまらないものを一つ選び、記号で

答えなさい。

ア 体の中に存在している江戸

イ 「常に少しずつ江戸」

エ 突出した部分の江戸  
ウ ぽっかりと突き抜けたような江戸

問三 ——線2 「そしてこの場合、～ありません」とありますが、

そのように述べている理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 筆者の説こうとしている「江戸」は、現代まで続く江戸情緒とは異なり、その時代に起きた特別な出来事を描こうとしているから。

イ 筆者の説こうとしている「江戸」は、「時代もの好き」な人たちには受け入れられないような、専門的で斬新な江戸の研究にあたるから。

ウ 筆者の説こうとしている「江戸」は、現代の東京に生きる若い人々に向けたものであり、そこには歴史や文化を背景に完成した「様式」の理解は不要だから。

問四 ——線3 「雑誌など～場所」とありますが、これと同様

の内容が表現されている部分を  より前の文中からさがし、十五字以内で抜き出しなさい。

問五 ——線4 「遺物から～別ですが」とありますが、ここでの「实用」について述べたものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 美術的・文化的な側面を重視し、現代においても有用なものとして利用すること。

イ 遠い昔の歴史的な存在と思わずに、現代の生活でも使用価値のあるものとして活用すること。

ウ 江戸時代の技術を絶やさずに、日本独自の文化を後世に伝えてゆくこと。

エ 江戸的と言われる行為や芸ではなく、当時の庶民と同じような価値観を身につけること。

問六 に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記

号で答えなさい。

ア 文明の開化

イ 空間の推移

ウ 感覚の共有

エ 時間の経過

かそれにについて述べたものとして最も適当なものを次の(中)から選び、記号で答えなさい。

選び、記号で答えなさい。

筆者は「江戸」を現在とは異なる存在としてではなく、現在の東京の生活空間のいたるところに遺された、文化や風情ふぜいとして理解したいと思っている。

イ  
筆者は「江戸」を「時代もの好き」な人たちだけの興味の対象としてではなく、現代の東京で暮らす人々にとつて未来のあり方を示すものとして理解したいと思つてゐる。

筆者は「江戸」を「時代もの好き」な人たちだけの興味の対象としてではなく、現代の東京で暮らす人々にとって未来のあり方を示すものとして理解したいと思つてゐる。

筆者は「江戸」を日本人にとっての価値観の基準として大切に守り、現在の政治・文化の中心である東京と同じように理解したいと思っている。

筆者は「江戸」を歴史的な事実や文化から分析するのではなく、現代の東京で生きる私たちにも通ずる、かたよりのない基準として理解したいと思つてゐる。

問八 次は、本文を読んだ後で、生徒と先生が交わした授業中の会話です。会話の後に四人の生徒から出された発言のうち、筆者の考

えと最も近い意見を述べている生徒をア～エの中から選び、記号で答えなさい。

**生徒**  
先生、筆者の述べる「江戸」のとらえ方は教科書やドラマな

先生 そうだね。一般的な歴史や文化を元にした「江戸趣味」や「ノ

そうだね。一般的な歴史や文化を元にした「江戸趣味」や「ノスタルジー」を否定しているのは面白いと思うよ。ここでの「ノスタルジー」は「江戸時代の文化は日本的情緒を代表する、素晴らしい遺産である」という過ぎ去つた時代を美化する価値観で、筆者はそれとは違う視点から「江戸」について述べようとしているんだね。

でも、「江戸」って百五十年以上前の時代でしょう。単純に、「昔の日本」ってことじやいけないのかな。

それについて、みんなで意見を出し合ってみるといいな。みんなで、筆者の述べようとしている「江戸」について話し合つてごらん。

ア 生徒A―― 筆者は教科書や映画に描かれるような特別な歴史的な事件ではなく、現代の私たちが毎日の生活を続けているように、ただ当たり前に日々の生活を送っていた江戸の人々の感覚に近づこうとしているのだと思います。

イ 生徒B——いや、日常的な人々の生活についてではなく封建社会における江戸時代の裏側を描くことによつて、身分制度という格差社会の中生きる庶民の絶望感を理解しようとしているのだと思ふ。

ウ 生徒C——でも、庶民といつても江戸というからには町民が主役どころ、今まで「う郡会」の生活に迷うる

眞が三体力から、全ての人生觀を知る。人間關係のつながりの弱さやそこに生きる人々の恋愛や結婚などの人生觀を知ろうとするといふことじやないのかな。

工生徒D——実際に、現代の私たちも、都会の人口過密や

工生徒D―― 実際に、現代の私たちも、都会の人口過密や大量消費型社会とか、いろいろな問題に取り囲まれていると授業では教わったけど、江戸の人たちもそれと同じ問題を抱えていて、今の僕たちにも共感はできると言つていいのだろうね。

「晴らしい選座である」といふ過ぎ去った時代を美化する価値觀で、筆者はそれとは違う視点から「江戸」について述べようとしているんだね。

先生

生徒







問

問

問

問

五

四

1

—

問

- 1 -

問

六

100

問

- - -

問

10

